

『氷室』2023年6号掲載用

季語つれづれ 番外（一四五） 仲夏 植物

【竹の花】 竹咲く

昔、竹の花が咲くと不吉な出来事が起こる前兆と考えられていた。開花周期が六〇年から一二〇年と長く、めったに開花しないことから天変地異と結びついたのであるう。

竹はイネ科である。稲穂に似た花を咲かせる。「花」というが色鮮やかな花々とは異なる。一斉に開花した後で竹林全体が枯死する。竹は繁殖力が強く成長も早い。開花するやいなや全部枯れてしまう。

竹の花は今でも大きなニュースとして扱われる。たとえば最近では静岡新聞が、浜松市の霊園で竹の花が咲き、訪れた人たちを驚かせていると紹介した。

竹は草でもなく木でもなく、タケ亜科に属す竹である。節があり、中が空洞で、他の植物にはない特性を持つ。食用としての筍があり、笛、筒、箱など道具に関する竹冠の字が多い。日本人は竹を暮しの中に取り込んできた。

竹の節の間隔は、根元が狭く、上に行くと長く、さらに先では短くなっている。根元は自重に堪え、先は枝葉を支え、中ほどの間隔で撓って強風の力を逃がす。維管束鞘は外側ほど密に通っていて、曲がりに強い。

竹のすべての節に分裂組織があり、成長点の多いので、早く成長する。筍に親と同じ数の節があつて、どんどん伸びる。竹が生む養分は地下茎で筍に送られる。

静岡県駿東郡長泉町に竹五〇〇種と竹の資料館を持つ富士竹類植物園がある。そこでも今竹の花が見られる。

『氷室』2023年7号掲載用

季語つれづれ 番外（一四六） 三夏 動物

【鰾】

講談社の『カラー図説日本大歳時記』には「あかえそ、まえそ、おきなえそなどがあり、本州中部以南の海に産する。普通に台所で料理する魚ではないが、かまぼこの材料になる」とある。

「なんだエソか」と釣り師には喜ばれない魚と言われ、顔つきや食べにくさで人気のない魚であるが、一部では高級魚として扱われる。名前の由来は大和朝廷に遡る。朝廷に属していない人々を「ヒナ」「エミシ、エソ」と呼んだ。意味は差別用語で、嫌悪感、見るに堪えないという意味である。この魚は醜悪な魚という意味で名付けられた。

海水魚で、生息域は水深一〇〇メートルより浅瀬、海底が砂地になっている場所に生息している。千葉県から九州の太平洋沿岸、若狭湾から九州の日本海の比較的暖かい地域に分布している。日本以外ではインドから西太平洋にも分布する。

夜行性で、昼間は海底で砂の中へ潜っている。夜に活動を開始する。肉食魚で貝類や甲殻類、他の魚類などで自分より小さい生き物は何でも捕食する。産卵期は春から夏で、脂ののった食べ頃もそのころである。雄よりも雌のほうが大きい。

成魚の全長は一〇センチから七〇センチ、吻が短く頭の前方に大きな目がある。目の後ろまで大きく開く口に小さな歯が並ぶ。体は細長く、断面は丸く、円筒形の体型であ

る。鱗は大きくて硬い。鰭は体に対して小さい。背鰭と尾鰭の間に小さく丸い脂鰭があるのは、鮭、鮎などと同じ特徴である。

魚肉練り製品の原料としては癖の無い淡泊な味で歯ごたえが良い。市場では蒲鉾業者が殆どを買い占める。鱗を取り頭を真上から包丁を入れて腹びれも落とすように切り、よく洗ったら腹から尾鰭にかけて切り込みを入れ、向きを表に変え包丁の背中 で身を叩き、また裏返して骨を付け根から剥がす。骨ごと擂り身として蒲鉾の高級品となる。西日本では天ぷらや竹輪にも利用される。和歌山県では南蛮焼に利用され、干物は通の食材である。

高知市大橋通の名所になっている「松岡かまぼこ店」では創業以来、厳選した材料と伝統の技を受けついで手づくりの蒲鉾や「てんぷら」が買える。その蒲鉾は土佐沖の鰯を主に、魚の性質を見分けながら魚を一匹づつさばいて細かい骨もくだいてなめらかにし、うすで摺り、職人が一本ずつ丁寧な板に載せる。店長の加茂香奈さんが描いた四駒漫画は『アテはテンブラ カモカナ!!』第一巻から四巻が出版されている。

蒲鉾店二代目の手に土佐の鰯 尾池和夫

『氷室』2023年7号掲載用

季語つれづれ 番外（一四七） 初夏 植物

【バナナ】（その二）

以前、「バナナは草本である」と書いた。園芸学上は野菜に分類され、葉鞘が重なりあってできた偽茎の先端から

ぶら下がる。一本に一回バナナを収穫すると枯れる。栽培すると収穫と同時に大量の廃棄物ができる。それを動物園に運んで象の餌に活用する知恵がある。

京都府亀岡市で『京都はんなりばなな』を奈佐貴之さんと齊藤隆太さんが育てている。ビニールハウス三棟に台湾バナナの苗木を植えた。農薬を使用せず、活断層の運動でできた亀岡盆地の豊富で良質の地下水を大量に使って国産バナナとして出荷する。国内流通量全体の〇・二パーセントであるが、希少価値が高い国産バナナで高価ではあるが、無農薬なので薄い皮ごと食べると上品な甘みがある。そして収穫の終わった大量の葉、茎などを京都市動物園の象に届けた。普段は芭蕉を食べている象の反応はとてもよかったという。

『日本食品標準成分表二〇二〇年版（八訂）』によるバナナ一〇〇グラム当たりの数値をあげる。廃棄率四〇パーセント、エネルギー九三キロカロリー、蛋白質一・一グラム、炭水化物二二・五グラム、カリウム三六〇ミリグラムなどを含んでいる。塩分を排出し、むくみを解消するカリウムが豊富に含まれており、また食物繊維が腹の調子を整えてくれる。必須アミノ酸のメチオニンやリジンがビタミンB6・C・ナイアシン(B3)・鉄にはたらきかけることで、カルニチンという脂肪燃焼を促進する成分を合成する。

静岡県立大学の薬草園でも無農薬でバナナが育っており、収穫したバナナを学生たちと食べることがある。青いうちに野菜として皮ごと炒めることもある。一度に二〇〇本以上の収穫があるが皆がそれを待ちかねている。

『氷室』2023年8号掲載用

季語つれづれ 番外（一四八） 三秋 時候

【夜長】 長き夜

夜の短かさ、はかなさを惜しむ気持ちで詠むのが「短夜」、それに対して「日永」、「夜長」、「短日」という季語がある。物理的な時間の長短にも増して季節の変化などの情感を大切にして詠む季語である。

秋の夜の長いことをいうのであるが、昼と夜がほぼ同じ時間となる秋分が過ぎて、昼よりも夜が長くなり始めると、気分として夜の長さが身にしみるようになる。残暑もそれほど気にならなくなって、夜の仕事、夜の読書に励むようになる。へよそに鳴る夜長の時計数へけり 杉田久女へというように、物音に耳を澄ますこともある。

春には「日永」という季語があり、それに相對する季語が夜長である。「夜長」と理屈では同じ意味の「日短」があるが、これは冬の暖かな昼間が短いのを惜しむ気持ちを詠む季語である。

実際の日の出の時刻と日の入の時刻を京都で比べてみる。二〇二三年六月初めには四時四三分ごろであった日の出が、八月一五日には五時一七分で以後ほぼ一分ずつ毎日遅くなり一月初めには七時六分頃になる。六月末頃に一時一六分頃であった日の入は、八月一五日には一八時四七分で、以後日毎に一分から二分ほど早くなり、一二月初めには一六時四六分になる。

二〇二三年の夏至は六月二一日、冬至は一二月二二日で、両者の日の出ていない時間の差は五時間ほどである。

『氷室』2023年8号掲載用

季語つれづれ 番外（一四九） 三秋 天文

【霧】 朝霧 夕霧 夜霧 山霧 川霧 狭霧 霧襖

濃霧 霧時雨 霧笛

霧は空気中に含みきれなくなった水蒸気が、小さな水滴となつて出てきたものと言える。この水滴が光を反射したり吸収したり散乱させたりして視界が白っぽくなる。

気象庁用語の説明では、「霧」は「微小な浮遊水滴により視程が一キロメートル未満の状態」で、「濃霧」が「視程が陸上でおよそ一〇〇メートル、海上で五〇〇メートル以下の霧」とある。また、その備考には「濃霧注意報と同一基準で用いる。濃霧注意報の基準は地方によって多少異なる」とある。

「蒸発霧」は水面から蒸発している水蒸気が、冷い空気によつて冷やされて発生する。空気の冷たい川の「川霧」が典型的である。「移流霧」は暖かい空気が流れこんできて冷たい水面や地面に冷ひやされて発生する霧で、初夏の海に出る「海霧」などである。「滑昇霧」は水蒸気を含む空気が山の斜面に沿つてのぼつて上の方で冷えて発生する霧で、山の下から見ると雲である。「放射霧」は晴れて風の弱い日の夜から朝にかけて冷えこんで発生する。山に囲まれた盆地に多い。「前線霧」は温暖前線付近で降雨に伴い発生する。

発生原理も構成する水滴も雲と霧は同じである。地面に接していると霧、接していないと雲である。山にかかる観測者の位置で変わる。登山のときはガスと呼ばれる。

『氷室』2023年9月号掲載用

季語つれづれ 番外（一五〇）仲秋 生活

【月見】 観月 月祀る 月の宴 月を待つ 月見酒
月見団子

月見は、月を、それも主に満月を眺めて楽しむことで観月とも言う。月見は、主に旧暦八月一五日から一六日の夜（八月十五夜）と、日本では旧暦九月一三日から一四日の夜（九月十三夜）に催す。それぞれを月見の「十五夜」「十三夜」と言う。

中国でも日本でも、月を愛でる慣習は古くからある。日本神話や古事記には「月夜見命（つくよみみこと）」が登場する。『竹取物語』には月を眺めるかぐや姫を姫が注意する場面があり、月見を忌む思想も同時にあった。

平安時代、月見は規模が大きくなり、延喜一九（九一九）年に宇多法皇が日本独自の十三夜の月見を催した。当時の日本の月見は、詩歌や管絃を楽しみつつ酒を酌むような催しであり、庶民には縁遠いものであった。

明代の中国では、宴会に加えて名月の日に供え物や月餅を贈り合う習慣が始まった。日本でも室町後期は名月の日に月を拝んで供物を供える風習が生じた。

東アジアでは里芋の収穫祭がある地域が多く、日本でも月見に里芋を食べた。月見が世俗化した江戸時代前期には、十五夜の日に芋煮を食べて夜遊びすることが一般的となった。江戸中期以後、家庭で供物の習慣が始まり、十五夜の日は文机を祭壇として、供物に江戸では球形、京阪では里芋の形の月見団子を供えるようになった。

『氷室』2023年9月号掲載用

季語つれづれ 番外（一五二）仲秋 天文

【更待月】 更待の月 更待 亥中の月 二十日亥中 二十日の月 二十日月

更待月は陰暦二十日のことである。二十日月とも呼ばれる。夜が更けるころに昇ってくる。

平安時代、貴族たちは中国から伝わった「観月の宴」で、直接月を見上げることとはせず、池に浮かべた船に乗り、水面に映った月を見ていた。天皇は神とされていたので、自分より上を見上げることとはしなかった。

月の出は一日経つごとに、四〇分から五〇分遅くなる。それぞれの月の呼び名を時刻順に並べると、三日月、上弦の月、十三夜、十五夜、十六夜、立待月、居待月、寝待月、更待月、下弦の月で、更待月は二十日である。天候次第で月を望めない場合もあるから地方により「月待ち」の風習がいろいろある。「二十三夜待ち」まで行う地域が多いが、中には「二十六夜待ち」まで行う地域もある。

月光に阿弥陀仏、観音、勢至の三尊が現れることを口実に、月が昇る深夜の二時ごろまで遊興に耽ることがあったという記録もあるが、このような風習は明治時代に入ると急速に廃れた。

現在、月と地球の距離は約三八万キロある。だから私たちが移動する距離くらいでは、月が見える方向は変わらない。街の明かりのない場所では月の光のまぶしさに驚くことがある。星を見る美星町では月の光が眩しくて影ができる。満月の明るさは、一等星の約三〇二〇〇〇倍である。

『氷室』2023年10月号掲載用

季語つれづれ 番外（一五二） 晩秋 生活

【新蕎麦】 走り蕎麦

秋に収穫された実で作る蕎麦が「新蕎麦」である。蕎麦の実や、それを粉にして蕎麦切りにしたものであるが、「秋蕎麦」ともいう。新蕎麦の時期は秋以外にもあり、秋蕎麦を「秋新（あきしん）」と呼んで区別することもある。また、蕎麦の栽培は地域によって差があり、七月から九月までに種まきを終え、約三か月後の九月から十一月にかけて収穫されるのが一般的である。実を乾燥させる工程があり、蕎麦屋に出るのは一〇月から一二月ということになる。

「夏新（なつしん）」の名で知られているのは、四月から六月に種をまいて二か月半後の六月から八月に収穫される蕎麦である。これは七月から九月に店に出る。

秋蕎麦は香り高く、深い味わいが楽しめることから、江戸時代には食通がこぞって求めた。日本全国で栽培されているが、中部から北の地方に名産地が多い。茨城の「常陸秋そば」を筆頭に、小粒ながら甘みと粘りの強い福井の在来種が特に有名である。「戸隠そば」と「わんこそば」の日本三大蕎麦がある長野や岩手、「出雲そば」の島根も知られている。

蕎麦は一年分を蕎麦粉店が保管したり、蕎麦屋が自分で保管したりしている。そこで新蕎麦は明らかな違いがあり、晩秋の季語として定着した。私が行く京都北白川の「藤芳」では、北海道から始まって各地の新蕎麦が、秋の間次つきと楽しむことができる。

『氷室』2023年10月号掲載用

季語つれづれ 番外（一五三） 三秋 植物

【稲】 初穂 稲穂 陸稲 稲穂波 稲の香 稲の秋

イネ科イネ属の植物は、今二三種七七系統が知られている。このうちの二〇種が野生の稲であり、二種が栽培の稲である。栽培の二種は、アジア栽培イネ（アジアイネ）とアフリカ栽培イネ（アフリカイネ、グラベリマイネ）である。稲には結実も親株が枯れず株が生き続けるという多年生型と、種子により毎年繁殖して枯れる一年生型がある。その中間型集団も多く存在する。

アジアイネには耐冷性の高いジャポニカ種（日本型）と耐冷性の低いインディカ種（インド型）の二つの系統があり、中間品種群も多数ある。ジャポニカ種（日本型、島嶼型）の稲は、日本、朝鮮半島、中国など温帯から亜熱帯の地域で栽培される。ジャポニカ種は温帯日本型と熱帯日本型（ジャバニカ種）に分けられ、温帯日本型（温帯島嶼型）が主に日本や中国遼寧省で栽培される。

水田で栽培する稲を水稻（すいとう）、耐旱性が強く畑地で栽培する稲を陸稲（りくとう、おかぼ）という。日本でははっきり区別されるが日本以外では区別がない。

交配育種法で新しい品種が得られる。雑種集団の親が二品種のみの場合を単交配といい一般的に広く用いられ、コシヒカリ、ひとめぼれ、あきたこまち、ゆめぴりかななどがこの方法で育成された。庄内平野では九月下旬から「ひとめぼれ」、その後「はえぬき」「コシヒカリ」、最後に一〇月下旬に、私の大好きな「つや姫」の稲刈りが行われる。

『氷室』2023年11号掲載用

季語つれづれ 番外（一五四）三冬 植物

【蜜柑】 蜜柑山

日本で蜜柑というと普通は温州蜜柑のことを指す。中国の浙江省温州地区が蜜柑の名産地であるため、中国原産と思われがちだが、温州蜜柑の原産地は日本である。静岡県
の温州蜜柑は、年間収穫量は一〇万トンから一三万トンで、隔年の差が大きい。主な産地は浜松市の三ヶ日などをはじめとして静岡県の全体にわたって産地がある。

柑橘類は、ミカン科ミカン亜科ミカン連のミカン属など数属の総称で、この言葉は日本の造語である。

温州蜜柑と橙、夏蜜柑のミカン属は芳香性健胃薬として、胃腸薬に配合される。芳香性健胃薬は芳香または臭気が嗅覚を刺激し、消化器の亢進、消化液の分泌を促進させる効果がある。温州蜜柑の成熟した果皮を干したものが生薬の陳皮（チンピ）である。陳皮は七味唐辛子に入っている。先人たちが考えた日本独特な香辛料である。芳香性健胃薬と同じく、食欲不振、消化不良の症状に良いとされる。

橙の成熟した果皮を干したものは生薬の橙皮（トウヒ）になる。橙皮は「日本薬局方」の第一版より引き続き収載されている。橙は正月飾りが一般的によく知られている。果実は枝に付いたまま二年位落ちないため、次の年も代々実がついている様を例えて、ダイダイという名が付いた。ダイダイはサワーオレンジの変種である。一般的にオレンジと呼ばれるものは、スイートオレンジ（甘橙）とサワーオレンジである。

『氷室』2023年11月号掲載用

季語つれづれ 番外（一五五） 晩秋 植物

【仏手柑】

ブッシュカン（仏手柑）はミカン科ミカン属の常緑低木で、高温多湿な気候でよく育つ。寒さに弱いため、露地で越冬するのは温暖な地域に限られる。果皮が非常に厚く、果肉がほとんどない。果実の先端が尖り、皮が分かれて手の指を合わせている様な形をしている。「スダチ」「カボス」「ユズ」「レモン」と同じ香酸柑橘類の一種である。

レモンと類縁のシトロンの変種で、名前の由来は、形から仏陀の手という意味である。

仏手柑は主に観賞用で、茶の湯の席の生け花に用いられることもある。正月飾りにする地域もある。食用にもするが、身が少ないので砂糖漬けなどの菓子にしたり、乾燥させたりして食べる。果実や花は漢方薬にも利用される。

仏手柑の最大の特徴は、大きさも形も同じものができないということにある。手が開いたようになっているものもあれば、閉じているものもあり、千差万別である。したがって産地へ出向いて自分で選んで観賞用とするのがいい。

観賞したあとは、良い香りがするので部屋に置いておくといい。さらに香りを楽しんだあと、砂糖漬けにする。

仏陀の手の形の仏手柑とは形のまったく異なる仏手柑がある。高知県四万十川流域で栽培されているブッシュカンは、同じ香酸柑橘類の「餅柚」と呼ばれる品種であり、緑色で球状の果実である。これを「丸仏手柑」と呼び、「手仏手柑」と区別する。

『氷室』2023年12月号掲載用

季語つれづれ 番外（一五六）三冬 天文

【虎落笛】

木枯が吹く頃、日に日に風の冷たさが増してくる。日本列島では冬の風に関する言葉も多様である。虎落笛、鎌鼬、北風などの季語もある。

虎落笛は、寒風が柵や竹垣に当たって鳴る現象である。ヒューヒューとか、ぴゅうぴゅうという風の音の表現があり、人びとが実感を持っている。「もがり」とは貴人を仮葬した場所である殯宮のことで、それを囲う竹垣を表すようになった。また、中国で虎を防ぐ柵を意味する「虎落」の字をその竹垣に当てた。戦のとき竹を組んで柵とした矢来のようなものや、竹を立て並べた紺屋（こうや）などの物を干す虎落という。

物理では、風の障害物の風下側にできる「カルマン渦」によって起こる「エオルス音」を指す。エオルスの名は、ギリシア神話の風の神「アイオロス」に由来する。竹垣の竹に風が当たると、竹に沿って動く風は摩擦抵抗で遅くなり、竹に沿わない風は摩擦抵抗がない分早く流れる。それにより、竹の後ろにカルマン渦、つまり風の回転が起こる。

冬の季節風は北よりの風が強くて、しかも長く吹き付けるので虎落笛が長く聞こえる。他の季節では一定方向から強い風が長い時間吹き込むことが無いので聞くことが少ない。長大橋の細い手摺や吊橋の縦ワイヤーで、ときどき聞こえることがある。台風の風などで電線から聞こえてくることもある。

『氷室』2023年12月号掲載用

季語つれづれ 番外（一五七）三冬 天文

【霰】 玉霰 夕霰 初霰

霰は、雲から降る直径五ミリメートル未満の氷の粒であり、雪霰と氷霰がある。

雪霰は（ゆきあられ）は白色で不透明な氷の粒で、形は球状や半円錐状である。直径は二ミリから五ミリメートルくらいで、堅い地面に落ちると弾みながら、よく割れる。砕けやすく、踏むと簡単に潰れる。雪霰は隙間を多く含むため、比重は〇・八未満とかなり小さい。ちなみに純水の氷の比重は約〇・九二である。雪霰は地表の気温が摂氏〇度前後のとき降る驟雨性の降水で、雪とともに降ってくる。

氷霰（こおりあられ）は半透明の氷の粒で、形は球状、たまに半円錐状の尖った部分がある。直径は五ミリくらいで、五ミリを超えると「雹」に区分される。堅い地面に落ちると弾み、踏んでも潰れない。隙間が比較的少なく、比重は〇・八を超えて〇・九九に近い場合がある。

氷霰は、雪霰が雹に成長する途中の状態である。雪霰は、強い上昇気流のある積乱雲や発達した積雲の中で、過冷却の水滴に衝突し凍結し、部分的に融けたり再び凍ったりという過程を経て大きさを増す。その小さいものが氷霰で、大きいものが雹である。

気象観測装置を導入したアメダスやほとんどの地方気象台では、天気 of 雨雪判別（雨・雪・霰）のみである。落下する物の大きさの測定が難しいので、霰などの大気現象の記録は二〇一九年二月に廃止された。

『氷室』2024年1月号掲載用

季語つれづれ 番外（一五八） 晩冬 時候

【寒】 寒中 寒の内 寒四郎 寒九 寒土用 寒の朝

関連の季語に「寒の入」「小寒」「大寒」「寒明」がある。

寒は、暦の上で寒さが最も厳しいとされる期間のことで、寒中、寒の内とも言われる。二十四節気の小寒の日から立春の前日である節分までの約三〇日間で、大寒の日がほぼ中間となっている。小寒の日を「寒の入」、立春の日を「寒明」といい、「寒明」は初春の季語である。寒に入ると寒中見舞を投函する。寒の後半、つまり大寒の日以降にはさまざまな寒稽古が行われている。

小寒は正月気分が抜け、仕事などの活動が本格的に始まる時期でもある。背筋を伸ばして新たな一歩を踏み出す。寒に入って九日目を「寒九」という。寒九は通常、一月一三日か一四日頃である。「寒九の水」は寒九に汲む水のこと、薬を飲むのによいとされている。また、餅を搗くのにも酒を造るにも、とりわけこの日が向いていると考えられている。寒九に降る雨は「寒九の雨」と呼ばれ、豊年の兆しである。

暖かくなつてから急に寒さが戻ることを「寒の戻り」という。全国的に気温が下がる。日本列島が移動性高気圧に覆われる時、または低気圧が通過した後、一時的に西高東低の冬型の気圧配置になって北寄りの風が強まり、朝晩、放射冷却が効いて冷え込む。遅霜が降りる可能性があるの観葉植物は家の中に入れる。気象庁では低温に関する異常天候早期警戒情報を出して注意を呼び掛ける。

『氷室』2024年1月号掲載用

季語つれづれ 番外（一五九）晩冬 時候

【寒波】 寒波来

気象用語で「寒波」とは、主に冬期に高緯度地域にある非常に冷たい空気（寒気）が南下し、中緯度地域の広範囲に二、三日またはそれ以上の期間、平常より著しく気温の低い状態をもたらす現象をいう。北半球では北緯四〇度付近を流れる偏西風（寒帯ジェット気流）が南北に蛇行すると、寒波の要因となる寒気が南下しやすくなる。

強い寒波が来ると暴風や高波、積雪や低温で、さまざまな交通障害が発生するほか、積雪によるビニールハウスなどの農業施設の倒壊、着雪による倒木や断線による停電などの被害が懸念される。強い寒波が予想される時には気象台は「強い冬型の気圧配置に関する気象情報」を発表する。

例えば、二〇二三年一月二四日、気象予報士が記録的な寒波が来るので、各地で大雪、猛吹雪に警戒をと解説した。この時、日本の上空にこの冬一番の非常に強い寒気が流れ込み、東日本や西日本の日本海側で急激に積雪が増えているほか、九州や四国の平地でも雪が積もっているところがあった。

広い範囲で大雪となるおそれがあるほか、あす朝にかけて全国的に一〇年に一度程度の低い気温となって広い範囲で交通への影響や水道管の凍結などの被害が出るおそれがあるという気象情報であった。この「早期天候情報」は、沖縄を除く全国に対して発表され、三重県南部でも大雪、京都も一五センチの積雪となった。

『氷室』2024年2月号掲載用

季語つれづれ 番外（一六〇）三冬 動物

【笹鳴】

鶯の鳴き方の一つである。鶯は冬になると餌を求めて山を下り、人里で暮らしている。春には鶯の季語があり、句鳥、春告鳥、初音、鶯の谷渡りなどの傍題がある。また、夏には老鶯が夏鶯、乱鶯、残鶯などの傍題とともに登場する。新年の初鶯はめでたい季語であり、冬の鶯は冬の季語で、藪鶯、笹子（ささこ）という傍題がある。笹子とは笹藪で鳴き方を整えている鶯のことで幼鳥のことではない。

春には見事な声の鶯であるが、成鳥の鶯でも冬期にはチャチャツという地鳴きしかできない期間がある。それを笹鳴という季語で詠む。

鶯はほぼ東アジアに生息する。日本、サハリン、中国東中部で繁殖し、中国南東部、台湾、東南アジアで越冬する。ハワイ諸島にいる鶯は日本から移入されたものである。日本では全国に分布し、夏に山地で過ごし冬季に平地へ移動する漂鳥である。移動しない留鳥となっている地域もある。平地から高山帯へと環境適応能力がある。

笹の多い林や藪を好んで棲む。ときに笹鳴きの最中に開けた場所に姿を現すこともあるが、普通は警戒心が強くてなかなか姿が見えない。

雄の「ホーホケキョ」が縄張り宣言の鳴き声で、巢に餌を運ぶ雌への安全信号、「ケキョケキョケキョ」は侵入者や外敵への威嚇で、雌への危険信号でもあり、この合図で雌は物陰に隠れる。

『氷室』2024年2月号掲載用

季語つれづれ 番外（一六一）三春 動物

【轉】

春、鳥たちは繁殖期を迎える。轉は縄張り宣言や雌を呼ぶために、繁殖期の雄が発する鳴き声である。恋の歌を高らかに唱いあげるのが轉である。鳥の鳴き声は四季を通して聞くことができるが、季語としての「轉」は春の求愛の鳴き声のことを特に詠む季語である。

中でも鳴禽類は鳴管の筋肉がよく発達しており、高度な轉をする種がある。

鳥の鳴き声にはいくつかの種類があり、轉の他には、地鳴きがある。主に繁殖期以外での鳴き声を言う。一例として、鶯の場合には轉が「ホーホケキョ」、地鳴きが「チャッチャ」と、笹鳴と呼ばれる声である。

鳥には気囊がある。肺の一部にあたる呼吸器で、鳥は効率的に酸素を得ることができる呼吸器を持つことにより、酸素濃度の薄い上空を飛ぶことが可能となり、ヒマラヤ山脈を越える鳥もいる。

同じ肺呼吸の動物でも、地上で暮らす哺乳類と空を飛べる鳥類では呼吸の仕組がちがう。哺乳類は横隔膜を利用し、鳥類は気囊を利用して呼吸する。気囊を使う呼吸は獣脚類と呼ばれる恐竜にもあった。その恐竜の子孫が鳥類である。

気囊は複数あり、吸うときに後気囊が働き、前気囊から吐き出す。鶯の場合、「ホー」が吸う息、「ホケキョ」が吐く息で、胸をいっぱい膨らませながら大きな声を出す。